

戦後日本における葬儀と葬祭業の展開¹⁾

嶋根克己・玉川貴子

Development of Funeral Service and Funeral Industry after the World War II

要旨： 経済成長、家族関係の変化、生活様式の近代化などの社会変動のなかで、葬送儀礼も大きく姿を変えつつある。遺族や親族のみならず地域共同体や職場共同体にとっての共同イベントであった葬儀は、個人主義化の進行や家族の独立化、孤立化の中で、家族主体で行われるようになっていった。その一方で、共同体が担ってきた葬儀実務を肩代わりするために専門的葬祭業者の出現は不可欠であった。しかし家族の絆が弱体化し、地域社会とのかかわりさえも薄れてきた現在、葬儀はますます縮小し家族や親族の中だけにおける私的な儀礼に姿を変えてきた。こうした状況を受けて経済産業省は、個人や家族が個別に解決を迫られてきた医療、介護、看取り、葬送儀礼、遺族の癒しを総合的につなぐことのできる制度作りにむけて検討する機会を持ち始めた。

キーワード： 葬儀、葬祭業者、死の社会学

はじめに

わが国の社会、政治、経済体制は、19世紀後半におこった明治維新らしい、何度か大きな変動に見舞われてきた。政治的には、幕藩体制から明治政府への移行とその確立、太平洋戦争の終結による戦前体制の崩壊、現在に続く国民権体制など。また経済的には農林漁業などの第一次産業を中心とする自給自足的な経済体制から、急速な工業化と資本の蓄積を経て、先進国の仲間入りを果たした。現在では第三次産業に就業する労働者の割合が大きくなってきており、人々の働き方や生活の仕方は以前とは大きく異なってきている。家族のあり方は直系家族を軸とした多世代同居型の家族構成から、夫婦家族を中心とする核家族世帯の台頭、そしていまでは未婚者や配偶者と死別した高齢者の単身世帯の割合が増えて、「孤族」の時代、あるいは「無縁社会」などという言葉も聞かれるようになってきた。

こうした社会の根底で進行する社会変動のなかで、人の死をめぐる社会的行為である葬送の儀礼（以下、葬儀あるいは葬送儀礼）も大きく姿を変えつつある。つい数十年前までは、葬儀は遺族・親族のみならず地域共同体、職場共同体にとっての大きなイベントであった。死者は多くの人々に見送られてこの社会から姿を消していったのであるが、個人主義化の進行や家族の独立化、孤立化の中で、葬儀は家族主体で行われるようになっていった。それに加えて家族や親族の絆は弱体化し、あるいは地域社会とのかかわりさえも薄れてきた現在、葬送儀礼はますます縮小し家族や親族の中だけにおける私的な儀礼に姿を変えてきた。なかには誰からも見取られない孤独な葬儀さえも生じてきており、葬送儀礼は変貌を

続けている。

しかしながら葬送儀礼が共同体執行の手を離れ、故人や家族・親族の私的なイベントとなっていくためには、上記に述べた専門的葬祭業者の出現と、儀礼執行に必要なサービスの商品化という要素が不可欠であった。すなわち専門的職業として葬祭業がサービス産業として確立して、社会に定着することが必要とされたのである。

このように考えてくると、葬儀の変化と葬祭業者の介入は、日本の社会における根底的な変化を示していると判断できよう。そして現在は、日本の葬儀と葬祭業がさらに変化を速めている時代でもある。

本稿では、庶民の葬儀のなかで葬祭業者の役割がどのように変化してきたかを、映画作品や先行研究をもとに形態的に検討し、また背景にあった葬祭業界の成立について簡単に述べる。さらに昭和後期から平成年間にかけて実施されてきた都市部における現実の葬儀をモデル化しながら、そこにおける葬祭業者の役割の大きさを確認していく。共同体が提供してきた葬儀実施のための無償の役務が、葬儀サービスとして業者に委譲されていくことによって生じる金銭的な負担を家族が背負い続けてきた状況にも簡単に触れると同時に、その構造が現在大きく揺らいでいることを述べてみたいと思う。

最後に葬送儀礼と葬祭業の大きな変動のなかで、葬祭業をふくむライフエンディング産業を構想するにあたって、経済産業省が現在行っている研究の方向性とその意義についても簡単に触れてみたい。

1. 作品に表現された日本の葬儀

映画や小説などのフィクションの世界では、日本の葬儀はどのように描かれてきたのであろうか。本節では葬

祭業者を軸にしながらいくつかの事例を取り上げてみたい。ある程度恣意的な選択にならざるをえないが、多くの観客、読者の目に触れたと思われる作品をもとに考えてみたい。

日本の映画作品ではじめてアカデミー賞を受賞した「おくりびと」（滝田洋二郎監督、本木雅弘主演、2008年）は、国内外で大きな反響を呼んだ映画作品である。

主人公は、偶然に葬儀業界、なかでも納棺師という特殊な業務に従事することになる。はじめは周囲からの差別的なまなざしと自己嫌悪にさいなまれているが、幾多の死と触れ合ううちに自らの職業意識に目覚めていくというストーリーである。死を送る人々の儀礼的な所作が美しく描かれており、共感をよんだ。

この作品の原作となる『納棺夫日記』（1996）は、実際に業務に携わる人によって書かれた、ある部分リアルで、またある部分は思想的な随筆であるが、小山薫堂によるシナリオ（小山；2009）は、一人の若者の自己発見と成長の物語としてアレンジされている。

筆者の知る限りでは、映画「おくりびと」は葬祭業者の内実を多少とも明らかにしながら描かれた唯一の日本映画である。そして葬儀に関わる業者を主人公にしているという意味で、画期的な作品である。

葬儀を主題にした映画は1980年代にも存在した。「社葬」（舛田利雄監督、緒方拳、江守徹主演、1989）と、「お葬式」（伊丹十三脚本・監督、山崎努主演、1984）である。

前者は、最終場面に「社葬」というきわめて日本的な場面が登場するものの、その主題は企業内派閥抗争であるため、ここではとり扱わない。

伊丹十三による「お葬式」は、長らくタブーとして扱われていた死や葬儀について、日本人の潜在的な関心を表に引きずり出したという点で、画期的な意義を持っていたと筆者は考えている。日本の高度経済成長を支えていたのは、地方から都市部に移住してきた人々であったが、この時期彼らは田舎に残してきた老親や家墓について、あるいは自分たちの死とともに生じる問題をどうすべきかについて、すでに悩んでいたのだと思われる。伊丹はこの状況をいち早く見抜いていたというべきであろう。

伊丹は自らの親族の葬儀での経験をもとにシナリオを書いた（伊丹十三『お葬式日記』）というだけあって、人の死から始まる遺族の動揺、葬儀の準備段階、実際の儀式の進行から火葬にいたる描写は克明である。一方、そこにペースを交えたフィクショナルな場面を付け加

えることによって、葬儀という主題の重苦しさを取り除くことに成功している。

主人公は、突然の義父の死亡によって田舎での葬儀を主催する立場に置かれた人物であり、慣れない葬送儀礼の準備や実施にとまどう都会人の姿が描かれている。

この映画では、葬祭業者は儀式に不慣れなよそ者を適当にあしらう怪しげな人物として登場している。本作品では、遺族の経験を彼らの立場から描いたものであり、葬祭業者はその脇役にすぎない。しかし集められた札束が乱舞するラストシーンには、儀礼的に香典のみを贈答しあう当時の葬送儀礼への批判的な視点が読み取れよう。

もう一作、葬儀が主題ではないが、葬送の場面が重要な背景となっている映画作品として、黒澤明監督の「生きる」（志村喬主演、1952）を挙げておこう。この映画では、葬儀に主人公は登場しない。なぜなら送られるのは主人公だからである²⁾。

「生きる」において、葬儀は主人公の人生（生き様）を関係者が総括する重要な場面設定となっている。定年間近に自分の死期を悟った市役所の職員である主人公は、上司と衝突しながらも庶民のために力を尽くして、最後に命を落とす。葬儀では同僚たちが彼の人生を振り返る。

本論にかかわる重要な点は、こうした葬儀の場面に葬祭業者と思しき人物が一切登場しないという点である。葬儀は、家族と同僚、そして恐らくは近隣住民が主体となって推し進め、葬祭業者はその補助的な役割しか果たしていなかったはずである。それがこの作品において葬祭業者が登場しなかった原因であろう。

映画ではないが、最後に今から100年前の文芸作品に現れた葬儀を取り上げてみたい。

写実主義の系譜に分類される長塚節は、同時代の庶民の生活を克明に描いた。中でも最晩年の大作『土』はその集大成とされる。和田伝の解説によれば『土』のモデルとなっているのは「作者の郷土である茨城県結城郡岡田村国生あたりと思われる」とされる。それだけにその描写にはリアリティがある。

『土』では、極貧のなかで、薬を買う金もなく妻を死なせた夫は、それでも当時の農村のしきたりにしたがって葬儀を出さなければならない。長塚は次のように書く。

（妻が死ぬと）病人の枕元に居た近所の者は一杯の茶を啜って村の姻戚へ知らせに出るものもあった。それから葬式のことを就いて相談をした。葬式はほ

んの姻戚と近所だけで明日の内に済すということに極めた。夜があけると近所の人々は寺へ行ったり無常道具を買いに行ったり、他村の姻戚への知らせに行ったり(した)。……(夫は)盥を据えてお品(妻)の死体を浄めて遣った。激烈な病苦の為にその力ない死体はげっそりと酷い糞れようをしていた。……それから土地の習慣で勘次(夫)は浄めてやったお品の死体は一切を近所の手に任せた。(長塚; 1950)

この後にも儀礼の様子は仔細に描写されているが、そこには葬祭業者の姿はでてこない。後節で指摘するように、伝統的な葬儀においては、葬儀執行の主体は近隣住民であるからである。

限られた資料をもとに日本の葬儀と葬祭業者の関係をたどってみた。ここから見えてくる結論のひとつは、葬儀にかかわる専門業者(本論ではそれを「葬祭業者」と呼ぶ)はきわめて近代的な産物であるという点である³⁾。

次節以降では、伝統的な葬儀がどのようにして現代的な葬儀に変貌していったのか、そこに専門職としての葬祭業者がどのように関わりながら成長してきたのかを、概括的に見ていくことにしよう。

2. 伝統的葬儀の概略

日本の前近代社会において執り行われていた葬儀が、いつの時期にどのようにして現在のような葬儀に変化したかを確定することは難しい。ここでは両者をかなり大胆にモデル化して、地域共同体が主要な労働力を提供する葬儀を「伝統的葬儀」、遺族が葬儀業者のサービスを購入することで成り立っているような葬儀を「現代的葬儀」、として論じていくことにしたい。

日本の葬儀の基本的な形式は、近世の農村で行われた仏教式の葬儀に求められる。江戸時代の日本社会は「檀家制度」をとっており、基本的に庶民はどこかの寺の信徒ということになっていた。現在ほど地方ごとの交通が盛んではなかったため、細かな儀式や習慣については、それぞれの地方ごと、仏教の宗派ごとにかかなりの違いがあったと思われる。しかしそれぞれの地域住民が所属している仏教寺院が宗教的な儀礼を執り行い、地域共同体が「葬式組」を形成して、「イエ」の葬儀を手伝うという基本構造は同じであったと考えられる⁴⁾。

また葬儀は時間的にみると大別して三つの部分に分けられることについては以前に指摘しておいた⁵⁾。臨終から葬儀の準備段階である「葬前儀礼」、多くの会葬者が

参加して行われる「葬中儀礼」、そして一定期間を経て宗教的な儀式をしたり、死者を思い出したりするための「葬後儀礼」である。「伝統的葬儀」では、次のような行為が含まれていた⁶⁾。

葬前儀礼；

臨終(自宅で死亡)

末期の水、枕経、枕飯、枕飾り、などの臨終儀礼

葬式組による葬儀の段取り、寺院や親類、近隣などへの知らせ

棺桶、装具、衣装などの調達、準備

湯灌、納棺(近親者、親類あるいは地域住民)

穴掘り

通夜(身内だけで行われる)

葬中儀礼

食事の準備

僧侶の送迎

葬儀(読経、焼香など)

出棺(自宅から)

野辺送り(地域の墓地まで)

土葬

会食(自宅)

葬後儀礼

初七日(7日後)、四十九日(49日後)、新盆(葬儀後初めての夏)、一周忌(1年後)、三回忌(2年後)、七回忌(6年後)、三十三回忌(32年後)。この他に春秋の彼岸参り、月命日(月ごとのお祈り)などがある。

葬儀の中核部分、すなわち葬前儀礼と葬中儀礼を行うためには地域共同体のメンバーによる「葬式組」が構成される。それは次のような役割分担で行われていた。

「帳場」；葬儀に必要な金銭・物品の出納管理をする。

「知らせ」；親類や知人への訃報や葬儀日程の伝達をする。

「寺方受持」；寺院(僧侶)との交渉・接待をする。

「葬具用意方」；葬儀に必要な飾り物の作成をする。

「板の間」；宴会用の食事の準備をする。

「穴掘」；土葬のための墓地の穴掘りをする。

このように伝統的社会では、葬儀の実施に必要なほとんどの労働力は地域共同体から提供されており、それらがなければ葬儀の実施は不可能であった⁷⁾。

伝統的葬儀を支えるもうひとつ重要な点は、「香典」である。現在の日本社会では「香典」といえば、遺族に提供される金銭のことを示すが、前近代社会においては

葬儀に必要な食事の材料や葬式に必要なさまざまな物品も含まれていた。

つまり伝統社会での葬儀は共同体の内部でほぼ完結しており、外部からの労働力や商品を導入する必要はなかった。しかし社会の近代化と住民の流動化は、地域共同体を解体に導き、葬式組による葬儀を不可能にしてしまった。そこで必要とされるのが葬儀業という新しい職業である。しばらく葬祭業の発展について見ていくことにしよう。

3. 第二次大戦後における葬祭業の展開

伝統的な葬儀では、親族や地域住民が棺を載せた「輿」を担ぎ、墓地まで葬列を組んで歩くのが最も重要な儀礼であると考えられていた。そのような葬儀では、葬祭業者は葬列に必要な棺や葬具を用意し、それを貸し出す物品賃貸業に過ぎなかった。こうした状態は第二次世界大戦後しばらく続いたが、1970年代に入って、ようやく葬祭業はサービス業として行政に認められるようになった⁸⁾。その過程を簡単に振り返っておこう。

日本は敗戦国ということもあり、食糧不足とインフレによって経済状況が極度に逼迫していた。そこで、政府は、生活の中で少しでも無駄や贅沢をなくそうとする「新生活運動」をすすめた。「新生活運動」の目的は、古い慣習にしばられた農村生活を少しでも合理化することであり、合理化すべき項目の一つに葬儀の簡素化も含まれていた。というのも、日本の農村においては、葬儀は派手に行われることが美徳とされていたため、葬儀で大量に消費される飲食物によって彼らの生活が圧迫されることを政府が心配したためである。政府は、戦後の生活苦から脱するためには、葬儀慣習に使われる費用さえも無駄だという考えを「新生活運動」によって示し、いつの間にか葬儀を簡素化する動きは各地に広がった。簡素化の内容は、花輪の小型化、供花供物の自粛、飲食の簡素化、香典返しの簡略化等である⁹⁾。

都市部の葬儀社は、こうした政府の考えに反対した。すでに生活の合理化が進んでいた都市部で、政府主導のもとに葬儀の簡素化がすすめば、自分たちの経営が圧迫されると考えたためである。この時結成されたのが、「全日本葬祭業組合連合会」（後の「全日本葬祭業協同組合連合会」＝「全葬連」）であった。彼らは葬祭業を、遺体を取り扱う特殊な職業ではなく、葬儀に必要な役務と商品を提供するサービス業であることを主張し、自らの地位の向上を図っていった。葬儀業がサービス業として公的に認められるようになったのは、1975年以降のこ

とである。

「新生活運動」以後、「葬式無用論」のような葬儀の簡素化の動きはときどき生じたものの、高度経済成長期から1990年代の経済不況が訪れるまで、葬儀の簡素化は沈静した。むしろこの時代は葬儀の拡大期であり、葬儀社は祭壇のレンタルを手掛けはじめ、それによって大きな収益を上げるようになる。

4. 祭壇の発達と葬儀業界

1955年から73年頃までは、日本経済が復興し高度経済成長を迎えた時期である。この時期は、葬祭業界にとってもビジネスチャンスが到来した時期といえるだろう。

火葬率の上昇や道路・交通事情の変化などにより、葬列は徐々に消えていった¹⁰⁾。葬儀が葬列中心から告別式型（イベント型）へ転換していくことで、祭壇の重要性が増していった。葬列のように移動しながら死を悲しむのではなく、告別式型の葬儀では自宅や葬儀会館といった特定の場所に人を集めて死を悼む。このような告別式型では、多くの人を集めた「華やかな」葬儀のほうが、死者の人徳を表しているとみなされるようになっていった。

後に詳しく述べるように式場や自宅に集まった会葬者は、祭壇に向かってお辞儀をしたり、焼香をするなど宗教的所作を行う。というのも、白木祭壇と呼ばれる木製の祭壇には、仏教的なモチーフがあしらわれ、他界観が表象されているからである¹¹⁾。しかし白木祭壇は世俗的な葬儀社の所有物であり、それを葬儀の時に遺族に提供しているにすぎない。そして祭壇には、それぞれ異なった等級（グレード）と値段が付けられ、その違いが、葬儀の等級でもあると理解されていたのである。このようにして葬祭業は祭壇のレンタル業へとシフトしていった。

白木祭壇については、碑文谷創や山田慎也が詳しく紹介している。碑文谷によると、祭壇は1953年前後から葬祭用具の間屋が全国の葬祭業者に対して売り込み、10年足らずで普及していったという¹²⁾。また、山田によれば、かつて葬列を組んでいた時代は、死者を入れた棺とそれを載せる輿が重視されており、それらによって社会的地位が表現されていたが、高度経済成長期以降、白木祭壇が社会的地位の表示になっていたという。この白木祭壇における社会的地位は、経済力の反映であり、経済成長と関連があると山田は指摘する¹³⁾。

5. 葬儀サービスの拡大

1975年、「全日本葬祭業協同組合連合会」は、通産省（現・経済産業省）より認可を受けた団体となり、葬祭業はサービス業としてようやく認められることになった。これ以降、葬祭業者は徐々に新たなサービスの開発に取り組むことになる。

1980年代後半からバブル景気に入った日本では、葬儀も派手になり、会葬者が多くなった。相次いで建設された葬儀会館は、派手な葬儀を演出にする場となった。葬儀が死者の自宅で行われていた時分には、祭壇などの葬具や棺の運搬、設置などが葬儀社の主要な業務であった。交通整理、受付、飲食の用意など人手のいる仕事は、親族や近隣の人々が手伝っていた。

しかし、住民の流動性が高くなったり、新興住宅地が開発されたりすると、住民同士の結合は弱くなっていった。また農業のような比較的時間の融通がきく職業に従事する人たちが減少し、会社勤務の人が増えると、彼らは近隣の家の葬儀のために会社を休みにくい。次第に近

隣地域からの協力を期待することはできなくなり、金銭契約による葬儀社のサービスを利用せざるをえなくなっていたのである。

また葬祭業者の側にも事情があった。自宅を会場とする葬儀では、業者は顧客の家に出かけて仕事をしなければならない。しかし、自前の葬儀会館を建設すれば、顧客と会葬者は葬儀業者のホームグラウンドまで出向いてくれる。その結果、祭壇や物品を運搬する人員も時間的コストも減少させられるようになり、役務サービスに力を入れることができるようになったのである。

「表1. 1980年代の葬儀社における物品と役務サービス」を見てもらいたい。葬儀社が提供する商品は、儀礼に関わる商品、移動に関わる商品、遺体に関わる商品、世俗的な手続きの4種類に大きく分けることができる。さらにそれら4種類の商品はそれぞれ物品の提供と役務サービスに分けられる。たとえば、儀礼に関わる商品の役務サービスのところでは、「遺族代表あいさつの代行」では、本来遺族が行うべきことが葬祭業者によって肩代わりされていることがわかる。また世俗の手続きと

表1 1980年代の葬儀社における物品と役務サービス¹⁴⁾

	物品	役務
儀礼に関わる商品	祭壇設備	告別式の司会
	門前装飾	遺族代表あいさつの代行
	室内装飾	僧侶、神官、牧師の紹介
	受付用の机・椅子	告別式の録音
	テント	告別式の写真撮影
	焼香設備	お布施等についての助言
	記録帳貼付紙	葬儀式場の紹介
	遺影写真	
	会葬礼状	
	ハンカチ	
	生花	
	粗供養品	
移動に関わる商品	霊柩車	道案内の標示
		ハイヤー、マイクロバスの手配
		病院から自宅までの遺体の搬送
遺体に関わる商品	収骨容器	死装束の着装
	寝棺（内装等付帯品、納棺用付属品一式含む）	遺体の湯灌
	ドライアイス	
世俗的な手続き		役所への死亡届の代行
		火葬の手配

*1980年代は、国民生活センター、(1988)『葬儀サービスの実情と比較』、27.より筆者作成

して「役所への死亡届」の代行も葬祭業者が請け負っている。

また、日本の仏教では、各「イエ」が一つの寺に所属する檀家制度をとってきており、所属する寺の僧侶が葬儀にさいして宗教儀礼を行うことになってきた。しかし、「イエ」が所属する寺（「檀那寺」）の僧侶がどうしても葬儀に出られない、あるいは居住地域に普段から関係している僧侶がいない場合、葬儀のためだけに葬儀社から僧侶を紹介してもらうということがある。表1の儀礼にかかわる商品の役務の項目に「僧侶、神官、牧師の紹介」とあるのは、このことを意味している。日本社会では、宗教的な帰依心がなくとも、僧侶に葬儀の司祭を頼むという世俗化現象が進んでいる。

6. 現代の葬儀の流れ

これまで、戦後の葬儀業の発展について簡単に紹介してきた。では現在の日本で行われている一般的な葬儀はどのようなものなのだろうか。それを行う遺族の観点から記述してみることにしよう。以下に述べるのは関東地方を含む東京都市圏の葬儀をモデル化したものである。

全体の流れとそれが行われる場所、そして儀礼における主要なアクターをまとめたものが「表2. 現在の葬儀の流れと主要アクター」である。この表を詳しく見れば、伝統的葬儀とは異なり、現在の葬儀における葬儀業者の関与が大きいことがわかるだろう。特徴的な部分をいくつかとりだして説明していく。

納棺

納棺は、通常死後一日か二日程度間をあけて行われる。「納棺」の意味は遺体を棺に納めることだが、「湯灌」などの儀礼を伴う場合がある。

「湯灌」とは死者の身を清めると同時に、遺体から流出する可能性のある汚物を処理することが主要な目的であり、伝統的には肉親などがすべき部分であった。しかし病院での死が一般化すると簡単な処置（清拭）は看護師の仕事となったために、現在では機能的な意味は失われている。

しかし映画「おくりびと」に見られるように、遺族の手を借りた形式的な清拭ののち、業者による遺体の丁寧な洗浄、着替え、死化粧などが葬儀サービスの一環として行われる場合もある。

外見を整えられた遺体は、遺族の手を借りながら棺に納められる（納棺）。その際に火葬の妨げにならない程度に、個人の愛用品、思い出の写真や品々、そして花などが棺に納められることもある。

納棺によって葬儀の準備は整い、自宅で納棺された場合には自宅から死出の旅への最後の出発となる。また葬儀場で納棺が行われた場合には、祭壇の中心に棺が移動され、最後の飾り付けが行われる。

通夜式

通夜式、葬儀・告別式がせまい意味での「お葬式」と呼ばれることがある。ここまでの準備段階においても葬儀業者の力は不可欠であったが、多くの人を集めて行われる儀式を滞りなく進めていくためには、業者のオーガナイズ能力、マネジメント能力、そして実際の役務の提供などが欠かせない。

通夜は葬儀の前日の夜に行われる。本来は遺族など親しい人々だけが夜を通して死者との別れを惜しむための時間であったが、現在では日中の葬儀・告別式に來れない人のために葬儀・告別式と同等の儀式として位置づけられている。したがって参加者は通夜か葬儀・告別式のどちらかに出席すれば「義理」は果たしたと考えられる。

通夜式もいくつかの部分に分けられるが、重要なものに限定して述べる。

日本の葬儀では「香典」が重要な役割を果たしている。あとで解説するように「香典」による収入がなければ、遺族はこれほどに金のかかる葬儀は行えない。葬儀会場に到着すると、参列者は受付において持参した香典を差し出し、自分の氏名を記録簿に残す。これが後日遺族からの返礼のための記録となる。

多くの参列者が集まる葬儀では、持参される金銭の総額は何百万円にもものぼる場合がある。受付を担当するのは近所の人、親しい知人、会社の関係者など、遺族が十分な信頼を置ける人たちである。金銭的なトラブルを避けるため、原則的に葬儀業者は受付に関与しない。

通夜式における宗教儀礼は、「葬儀・告別式」の一部を省いて簡略化されたものである。儀礼の内容については「葬儀・告別式」でくわしく述べる。

通夜の特徴は、参列者に「通夜振舞い」という簡単な食事と飲み物を提供することである。参列者は酒食をともにしながら、故人の思い出などを語り合う。遺族は席を回って通夜に駆けつけてくれたことや日ごろ個人と仲良くしてくれたことなどについてお礼を述べる。食事や酒を手配し、会場で給仕するのは葬儀業者の仕事である。

葬儀・告別式

通夜の翌日の日中に葬儀・告別式は行われる。火葬をすませてから葬儀を行う地方もあり、その場合にはいく

つかの儀礼の順序が入れ替わる。今日東京都で行われる葬儀の80%以上が仏教式であるので¹⁵⁾、以下も仏教式の葬儀をモデル化してみよう。

参列者は葬儀の前に前日と同じように受付を済ませておく。

儀式の司祭者である僧侶は、前日と同じように開式の30分ほど前に会場に到着し、遺族と簡単な打ち合わせや故人について話をする。この葬儀のためだけに呼ばれた僧侶の場合は、通夜式の直前が、遺族や故人について知る初めての機会である。僧侶は遺族との話の中から、故人の人柄や事績について知り、「戒名」(仏教名。ほとんどは死後に与えられる)を付けるための材料とする。僧侶は儀式のための衣服に着替えて、儀式が始まる時間を待つ。

会場の配置は、だいたい次の通りである。

正面中央に祭壇が設置される。棺は祭壇の中央に置かれているが、さまざまな飾り物で直接には見ることができない。儀式における視覚的な中心は故人の写真(「遺影」)である。祭壇の両側には花が飾られ、子ども、孫、親類など血縁の近い順に、あるいは仕事関係では重要な順に、花を寄付した人たちの名札が並べられる。

祭壇の正面に遺影と正対する形で僧侶の席が設けられ、近くには儀式に必要な仏具が並べられる。遺族、血縁者は正面に向かって右側の席の前方に並び、姻族などは左側に着席する。遺族や親類縁者の後方に一般の会葬者が着席する。

葬儀・告別式は次のように進行する。

司会者(業者)による厳かな開式の言葉とともに、僧侶が入場し、祭壇正面の席に着席する。仏教各派の形式にしたがって、僧侶は死者のための読経をおこなう。サンスクリット語を起源に持つ経の内容は、参列者にはほとんど理解できない。

司会者(多くの場合は葬祭業者)の進行によって死者に向かって弔辞が読まれる。事前に遺族が依頼した人、たとえば親しい友人や会社関係の人などによって弔辞はあらかじめ準備されている。内容は、故人との交友、想い出、故人の事績などであり、祭壇の遺影に向かって語りかけられる¹⁶⁾。

続いて死者や遺族に宛てられた電報(「弔電」)の紹介が行われる。弔電とは、葬儀に参加できない人が故人の死者を悼むために送ったもので、特別なカバーに入れて配達される。多くの人からの弔電がある場合には、社会的に重要な人や特に親しかった人の内容の一部だけが司会者によって披露される¹⁷⁾。

僧侶の読経が再開され、そのなかで順次焼香が行われる。葬儀業者から遺族、親族、姻族その他の人々の順に促されて祭壇前に進み出る。祭壇前に誘導された人たちは遺族、親族に一礼する。祭壇前では遺影に深くお辞儀をして、香を火にくべ、黙とうする。再度拝礼して後ろに退く。日本の葬儀では全員で祈りをささげたり、歌を歌ったりする習慣は少ないので、祭壇で焼香することが参列者全員が参加する重要な儀礼となる。

会場の外で手伝っている人も含めて、すべての参加者が焼香を終えると、僧侶は読経を止めて退出する。これで宗教的な葬儀は終了したことになる。儀礼的秩序が手早く解体され、直接見ることのできなかつた棺が飾り物を除かれて中央に持ち出されてくる。人々に囲まれて棺の蓋が除かれ、参列者は死者と「最後の別れ」を行う。これは故人の全身を見ることができ、直接触れることのできる最後の機会となる。参列者の悲哀感情が高ぶる場面の一つである。花などで遺体を飾り終えたのち、蓋は再度棺に被せられ、葬儀業者によって儀礼的な所作で釘でしっかりと固定される。棺の密封は死者と生者の心理的な距離を大きく遠ざける。

遺族の代表が参加者に感謝の言葉を伝えたのち、棺は人々の手によって霊柩車に運ばれる。火葬場への出発が、一般の人たちにとっての儀式の終了である。

火葬

日本の火葬が他国のそれと大きく異なるのは、火葬が儀式化しており、そこに遺族や親しい人々が参加することである。

霊柩車によって火葬場に運搬された棺は、すぐさま火葬炉の前に置かれる。遺族、関係者は棺の蓋に開けられた小さな窓から故人の顔を覗き込み、再度別れを惜しむ。僧侶の祈りの中で、係員によって棺は火葬炉の中に送り込まれ、火が点される。人々の悲しみが高揚する場面である。

火葬炉の発達により、火葬に要するのは約一時間である。その間、遺族と関係者は別室で待機している。火葬が終了すると遺族、関係者は小部屋に通される。そこでは焼かれた骨が台上に乗せられており、箸を使いながら二人ひと組で骨を拾って骨壺に骨を移していく。これが「拾骨」という儀礼である。

親しい人の焼骨を直視することは精神的な動揺をきたすと思われるかもしれないが、日本人にとっては慣習化された行為であるためか、パニック状態に陥る人はいない。むしろ共同で骨を拾うことで、故人の死を確認し、別れをいとおしんでいるようにも思える。

表2 現在の葬儀の流れと主要アクター

		内容	場所	主要アクター	業者の関与
一日目	葬前儀礼	死亡判定	病院	医師	
		死亡診断書		医師	
		末期の水		家族	
		清拭		看護師	
		遺体運搬			運送業者
		遺体安置	自宅	家族	葬祭業者
二日目	準備	日程調整	自宅	家族、親族	葬祭業者
		葬儀内容確定			
		費用見積もり			
		役割分担			
		死亡届・火葬許可申請			葬祭業者
		通知		家族	
弔問対応	家族				
三日目	葬中儀礼	湯灌、着替え	自宅／会場		葬祭業者
		湯灌、納棺		家族、親族	
		出棺			
		通夜式	会場	近しい関係者	葬祭業者
		受付		家族	葬祭業者
		僧侶応接		僧侶	運送業者
読経	会葬者				
焼香	会葬者				
通夜振舞い	会食				
四日目	葬中儀礼	受付	会場	近しい関係者	
		僧侶応接		家族	
		読経		僧侶	仕出業者
		弔辞		友人・知人	
		弔電			
		焼香		会葬者	
		釘打ち		家族、会葬者	
		出棺	遺族代表	司会者	
		火葬	火葬場	僧侶	
		入炉		家族、親族、近しい関係者	葬祭業者
拾骨	家族、親族、近しい関係者	運送業者			
精進落とし	会場	読経（初七日法要）	僧侶		
会食		家族、親族、近しい関係者	火葬場係員		
約49日後	葬後儀礼	読経	自宅／寺院／会場	僧侶	火葬場係員
		焼香		家族、親族	
		会食		家族、親族	仕出業者
不定	納骨	読経	墓地	僧侶	
		納骨			
		焼香	家族、親族		
		会食	寺院／会場	家族、親族	
約一年後	一周忌	読経	寺院／会場	僧侶	石屋
		焼香		家族、親族	
		会食		家族、親族	仕出業者
約二年後	三回忌	読経	寺院／会場	僧侶	
		焼香		家族、親族	
		会食		家族、親族	仕出業者
約7年後	七回忌	上に同じ			

骨壺は白木の箱に納められ、遺族の中の中心的人物に渡される。遺族と関係者は、骨を抱いて火葬場を後にする。

精進落とし

伝統的な慣習では、肉親が亡くなった最初の一週間、遺族は肉食を慎み仏教徒としての戒律を守らなければならないとされていた。七日後には強い禁忌が解けるので、「精進落とし」(菜食の終わりの食事)として人々を饗応することになっていた。しかし葬儀後に親族や関係者に再度集まってもらうのが難しいため、現在では火葬後に繰り上げて行われている。これが「精進落とし」である。実際的な意味合いとしては、葬儀に駆けつけてくれた親族や知人、そして葬儀を手伝ってくれた人々へのお礼の食事会という意味合いが強い。

前日の通夜式から、翌日の葬儀・告別式、火葬と続いてきた一連のセレモニーは午後の会食で終了する。家族の死に始まる、遺族にとっての「お葬式」は、こうして3~5日程度の日程で終わることになる。葬祭業者が遺族と深くかかわりながら、サービスを提供するのは多くの場合ここまでである。核家族化した現在では葬儀を実行するためのノウハウを世代間で継承することは難しく、多くの人々は葬祭業者のアドバイスや指示を受けなければ、何をしたらよいのかさえも分からない。この後の儀礼についても葬祭業者のアドバイスや物品の購入を必要とする場合もある。

法要と納骨

多数の人を集めて行われる「お葬式」は以上で終了するが、遺族や親族にとってはこの後も儀礼は続く。

日本の仏教的解釈では、故人の魂は死後49日後に生まれ変わるとされている。その日をめぐに家族や親族は再び集まり、僧侶による法要ののち、会食が行われる。これを「四十九日」とよぶ。こうした法事は、一年後、二年後、六年後…と定期的に続けられるものであったが、現在では簡略化の傾向にある。

四十九日を過ぎるころに、香典を持参した人への返礼品を礼状とともに送る場合がある(「香典返し」)。返礼をするかしないか、どの程度の金額の品物を返礼するかは、各地方によって習慣が異なる。

また火葬された骨は自宅に持ち帰られ、しばらくは簡単な祭壇に安置される。遺族の心の整理がつくころに、骨壺は墓に入れられることになる。墓は寺院付属墓地か公園墓地に「家族墓」として建てられていることが多い。納骨においても遺族や親族が集まり、僧侶による儀式ののちに、会食が行われる。

以上の流れを実施するのに必要な葬祭業者をはじめとする各種の専門職と遺族とのかかわりを示したのが表2「現代の葬儀の流れと主要アクター」である。この表をみれば、かつて近隣住民主体で行われていた葬儀が、さまざまな専門職に担われて行われるようになってきたかが一目瞭然であろう。この表をもとにした詳細な分析は他日を期したい。

7. 近代化による葬儀の変容

「伝統的葬儀」と「現代的葬儀」の大きな違いを、儀礼の内容と葬儀を支える人間関係という側面から考えてみよう。

死と葬儀を取り巻く条件として下記の点が大きく変化した。

第一は死亡場所である。近代的医療体制が整うにつれて、人が死亡する場所は自宅から病院に変わった。この50年ほどで病院死と自宅死の割合は完全に逆転し、現在では圧倒的に多くの人々が病院で死亡する。(表3 死亡場所の推移)

第二は埋葬方法である。現在日本の火葬率はほぼ100%と言われているが、20世紀の初頭には日本の火葬率は3割に満たず、多くの人々は土葬によって葬られてきた。その後、1950年に54%、60年に63.1%、70年に79.2%、80年には91.1%と経済の高度成長とともに火葬率は上昇を続けた。つまり全国各地に近代的な火葬場が建設されるまでは、地方での一般的な埋葬方法は土葬であった。

第三は葬儀の会場である。かつては葬儀は自宅で行われることが普通であった。しかし集合住宅に生活する人々が増えた都市を皮切りに各地に葬儀専用の会館が建設されるようになった。その便利さに気付いた人々が葬儀会館を利用し始め、現在では住宅に十分な広さのある地方でも葬儀会館利用が広まっている。東京都においても、1995年には42.0%の人が自宅で葬儀をおこなっていたが、2001年には11.3%にまで減少してしまった¹⁸⁾。

これらの変化は儀礼の流れとそれが行われる場所を次のように変えた。「伝統的葬儀」では自宅死→自宅葬→野辺送り→土葬というように、儀式は徒歩圏内でおこなわれ、土葬によって遺体の処理は終了する。これに対して「現代的葬儀」では死者は病院死→自宅へ搬送→葬儀会場→火葬場→会場というように特別な車両がなければ移動できない距離を動くと同時に、火葬された焼骨はかなり時間をおいてから墓に納骨されることになる。

以上のような物理的な変化は葬儀の内容をずいぶん変えたと言われる。都市部においては遠方にある火葬場ま

表3 死亡場所の推移

	病院	診療所	介護老人保健施設	助産所	老人ホーム	自宅	その他
1951	9.1	2.6	・	0.0	・	82.5	5.9
1955	12.3	3.1	・	0.1	・	76.9	7.7
1960	18.2	3.7	・	0.1	・	70.7	7.4
1965	24.6	3.9	・	0.1	・	65.0	6.4
1970	32.9	4.5	・	0.1	・	56.6	5.9
1975	41.8	4.9	・	0.0	・	47.7	5.6
1980	52.1	4.9	・	0.0	・	38.0	5.0
1985	63.0	4.3	・	0.0	・	28.3	4.4
1990	71.6	3.4	0.0	0.0	・	21.7	3.3
1995	74.1	3.0	0.2	0.0	1.5	18.3	2.9
2000	78.2	2.8	0.5	0.0	1.9	13.9	2.8
2004	79.6	2.7	0.6	0.0	2.1	12.4	2.6

(厚生労働省 人口動態統計年報より)

表4 戦後の火葬率の推移

	1950	1960	1970	1980	1990
火葬率	54%	63.1%	79.2%	91.1%	97.1%

(碑文谷；1996より作成)

で移動しなければならず、また交通渋滞などの問題で野辺送りが禁止されたことは、葬送儀礼の中心が屋外から屋内に移った原因とされている¹⁹⁾。

次に葬儀を支える人間関係の視点から見てみよう。社会的にみてもっとも重要な変化は、葬儀執行のための人的な力がどこから調達されるかという点である。以前に書いたものでも述べてきたように、伝統的葬儀を可能にしていたのは葬式組を中心とする地域共同体の協力(=「合力」)と香典による物質的・金銭的援助であった²⁰⁾。

しかし都市への人口の集中と住民の流動化は、何世代にもわたる相互扶助の形式を不可能にしていった。その結果、葬儀は地域共同体成員を主要な担い手とするのではなく、家族が主導し、葬儀業者などを雇うという基本システムの転換が必要となったのである。先の表2.をみれば分かるように、現在、葬祭業者等によるサービスの提供を抜きにして葬儀を実施することは不可能である。しかし葬儀サービスの購入という大きな変化は、人々による「香典」(=金銭)の提供によってはじめて可能になったのである。

こうした転換によって、1950年代に始まる高度経済成長期から葬儀は年々金のかかる派手なものになっていき、1990年代のバブル経済の崩壊まで続いたとされる。

8. 支出から見る「葬儀の商品化」

前節では、「伝統的葬儀」から「現代的葬儀」への移り変わりを簡単に紹介し、その背景には伝統的な社会関係の崩壊と葬儀サービスの商品化があることを示唆してきた。

日本の葬儀には金がかかるという指摘がされることが多い。それは葬儀を行った人の実感でもあり、政府が主導して葬儀の簡素化を目指した「新生活運動」、あるいは文化人が口火を切り、ジャーナリズムで議論になった「葬儀不要論」などによっても、日本の葬儀は金がかかりすぎると批判されてきた。本節では葬儀に必要な費用を分析しながら、結論を導きたい。

東京都が2001年に行った調査を再び参照してみると、この5年間に葬儀を行った人たちからの回答では、葬儀にかかった費用の平均は約346万円である。調査に協力した人々の65.2%が平均年収は800万円以下であると回答していることから、346万円は決して小さな金額ではない。(表5 葬儀費用の負担状況)

さらに詳しく内訳を見てみよう。

葬儀業者への支払いが約177万円と半分を占めている。しかしこの中には飲食・接待費が含まれているので、それを除けば150万円弱となる。たった葬儀の準備と二日間のセレモニー、そして会場借用料などで150万円を支払うのは、高額だと考える人たちが増加しているのは事実である。伝統的葬儀では、毎年どこかで起こる他家の葬儀に多くの労力と資産を投じながら、ごくまれにしか生じない自家の葬儀の備えとしてきた。こうした相互扶助は一種の保険とみなすことができよう。長期間にわたる労務の対価として地域共同体から「無償」で提供されていた労力を、見ず知らずの他人から「購入」しようとするれば、この程度の支出はやむを得ないという考え方もある。

数日間の葬儀の間に繰り返される飲食費の合計は約66万円となる。また「香典返し」として90万円以上が支払われているので、人々への接待とお礼に157万円の費用が掛けられている。この調査によれば、葬儀には平均約200人の参列者があったとされる。これだけの大人数の人々に食事や酒をふるまい、さらに返礼品を贈るためにはこのような大きな出費が必要となる。

次に大きな葬儀関連の支出として寺院への支払いがある。日本では僧侶への寄付を「お布施」というが、本来の寺院—信徒関係であれば、日常的な信仰心を与えてくれる僧侶が、故人を来世に導いてくれるのだから、それ

表5 葬儀費用の負担状況

葬儀者への支払い	1768.8	
そのうち飲食・接待費		293.2
寺院関係への支払い	642.7	
そのうち戒名料		381.7
香典返し	911.2	
飲食・接待費	362.3	
その他	232.4	
費用の合計	3458.6*	

東京都生活文化局『葬儀にかかわる費用等調査報告書』(2002)より筆者作成 単位は千円

*各項目と合計はアンケートの平均から算出しているため、各項目の合計値は「費用の合計」と一致しない。

なりの寄付をするのは当然だと考えられるだろう。ところが信仰心を持っていない人たちからすれば、こうした費用は、読経と戒名を「買う」ための支出ととらえられることがある。このような人たちの増加によって、日本の仏教界は大きな転換期に立たされている。仏教の宗教的機能が低下した結果、生と死を架橋し、残された遺族の心に平安を与えるという宗教者としての役目を、仏教の僧侶たちは十分に果たしていないという批判に、どう応えていくかが日本の仏教界の課題である。

このように見てくると日本の葬儀は、何か月分もの収入を投入しなければならず、遺族にとって大きな負担となるように思われる。しかし一方で「香典」による収入も計算に入れておかねばならない。200人の参列者が一人平均1万円の香典を持参すれば、200万円の収入となる。伝統的な葬儀における相互扶助の形式が現在まで続いてきたために、日本の葬儀に必要な高額な支出を可能にしてきたのだといえる。

しかし1990年代後半から葬儀を取り巻く状況は少しずつ変わってきている。一つには高齢化によって、高齢の死亡者が増加する一方で、生産人口が減少した。そのため経済成長期までのような「義理」や「付き合い」で高額な香典を払うということが難しくなっている。東京都の調査でも、1995年から2001年にかけて香典の平均金額が減少したことが確かめられている。このことは金をかけた派手な葬儀が難しくなってきたことを意味する。

また消費者の意識も変わりつつある。葬儀を「無意味な儀礼」と考える人々も出てきている。たとえば首都圏ではこの数年間で、「直葬」と呼ばれる葬儀形態が増えていると言われている。直葬とは、一切の儀式をし

ないで火葬、埋葬のみを行うことであり、これまでは身元不明人の遺体を処理するために行政が行ってきたものである。しかし現在では「煩わしい」儀式を避けて、自ら直葬を選択する家族もいると報告されている。また「直葬」ほどではないが、多くのひとに死を知らせず家族や近親者だけで葬儀を行う「家族葬」「密葬」も最近増加しており、葬儀が縮小化している。これはこれまで香典などの相互扶助に頼ってきた日本の葬儀が変わり始めたことを示している。

結論

第二次世界大戦後の混乱から高度成長、そしてバブル経済の全盛期とその破たん、こうした経済的変動が戦後の日本社会を大きく変えてきた。都市的生活様式の拡大、地域共同体関係の希薄化、核家族化と家族の縮小、少子高齢化など、わが国の社会関係に多大な影響を与えつつある。その結果、葬送儀礼の役務を提供する主体が、共同体から葬祭業者へと移行してきたことを概観してきた。またこのような社会的な需要は、葬祭産業というあらたなサービス産業の領域を生み出すことになってきたのである。

さて、現在葬儀の多様化によって、葬祭業界のあり方は大きく変化した。消費者のニーズの変化に合わせて、業者が提供するサービスも多様化しはじめている。先に述べた家族葬や直葬、あるいは自然葬や樹木葬への対応はその一例である。また効率的に事業を進めるためには、地元密着型の小規模な事業者ばかりでなく、大規模な資本や設備を有して広い範囲での営業をおこなう大手業者も出現してきている。こうした中で、葬儀のあり方を含めながらも新しいライフスタイルと産業のあり方を考えるための取り組みが行政の中にも出てきている。

2010年11月から経済産業省は、ライフエンドに向けて多様化する消費者のニーズと、錯綜する葬儀関連業界などの現状についての総合的調査に乗り出した。その意図するところは、日本社会が経験しつつある大きな転換を踏まえて、人々が安心と信頼のあるライフエンドを迎えることができる条件とは何か、そのための整備しなければならない産業的基盤は何か、を探ることにあるとされる。これまで死にゆく人とその家族たちに個別的、断片的にしか提供されてこなかったさまざまなサービスや情報を、総合的、有機的に提供できる制度を構築し、安心して利用してもらえる社会的基盤を作ろうというものである。

この調査研究会が実施しているいくつかの大規模調

査、具体的には、ライフエンディングステージについての利用者（予備軍を含む）の認知とニーズに関する調査、多様な業務形態が錯綜する葬祭業界全体の実態調査などの全貌は、これから一般に公開されていくはずである。

社会学的な視点からこうした動きを評するとすれば、次のような文脈で考えるべきであろう。これまで、家族・親族ならびに地域・職場共同体などが担ってきた葬送儀礼の実務能力や知識が、既存の集団内部で維持することができなくなり、その隙間を埋めるべく生まれてきたのが葬祭業者であった。たしかに葬儀の実施については葬祭業者はその役割を一定程度果たしてきた。しかしながら伝統的な葬送儀礼（その前後には末期の見取りや先祖の集団的祭祀なども含まれる）には、死にゆく者への身体的心理的ケアや家族の抱える諸問題への社会的なサポートという幅広い潜在的な機能も存在していたと考えられる。近代的な社会関係への変化の中で、種々の専門職によって援助やサービスが分節化され、あるものは商品として姿を変えていった。しかし社会のそれぞれの成員が、心安らかに人生の最期を過ごし、あるいは安心して家族の一員を見送るには、これまで私的な領域においてそれぞれが個別に解決を迫られてきた医療、介護、看取り、葬儀、癒しを近代的な制度の中で総合的に見直されていく必要が生まれてきているということである。

このような行政側からのアクションが今後どのような政策として実を結ぶのかは、現在のところ予測がつかない。「死」や「看取り」という誰もが経験することでありながら、共同社会の弱体化によって、これらを私的な領域の問題として個別に解決せざるをえなかった時代が長らく続いてきた。しかしこれらを社会的な問題として政策的に考えなければならない時代に、現在の私たちは生きているのである。

注

- 1) 本稿は、嶋根、玉川が参加してきた「フューネラジー (Funerarie ; アジアの葬儀) ネットワーク」(会長 Natacha Aveline-Dubach CNRS 北アジア地域事務所長) の最終成果物 (フランス語、英語で出版準備中) にむけての草稿であった。いくつかの事情により前記出版物に収録できないことになったので、現在進行中の最新情報を含めながら、内容を大幅に書き改めたものである。
 - 2) 偶然のことながら以上の三作品（「おくりびと」「お葬式」「生きる」）において、主人公はそれぞれの関わり方
- をしている。「おくりびと」においては、不特定な他者と関わる「三人称の葬儀」として。「お葬式」では、掛け替えのない「あなた」を見送るための葬儀を主催する「二人称の葬儀」として。そして「生きる」においては、本人自身が送られる「一人称の葬儀」として関わっている。ジャンケレヴィッチは「死」を、取り換え可能な「彼/彼女(ら)の死」としての「三人称の死」、かけがえのない「あなたの死」としての「二人称の死」、そしていつか迎えるべき「自分自身の死」としての「一人称の死」を区分して論じている。葬儀との人称的かわりも同様の構造を持つ。V. ジャンケレヴィッチ (1978) 『死』みすず書房
 - 3) 木下光生 (2010) 『近世三昧聖と葬送文化』塙書房は、都市部を中心に近世社会においてすでに三昧聖や葬具業者などの専門職が存在していることを、歴史的資料をもとに論証している。近隣集団の解体によって、彼らが提供してきた労務を代行する専門職としての現代の葬祭業者は、それらと機能が異なっていると判断しておきたい。
 - 4) この部分については以前の論文で、詳しく述べておいた。嶋根克己 (2001)、「近代化と葬儀の変化」、副田義也編『死の社会学』岩波書店。Katsumi SHIMANE (2004) <Planifier sa propre mort : l'après mort dans une société vieillissante>, in Pierre Ansart et al. (ed.) *Quand la vie s'allonge France-Japon*, L'Harmattan
 - 5) 嶋根克己 (1991) 「現代日本の葬送儀礼」『社会学ジャーナル』16号、筑波大学社会学研究室
 - 6) 伝統的な葬儀習慣の細部については、井之口章次 (1965) 『日本の葬式』早川書店、竹内利美 (1990) 『村落社会における葬儀の合力組織』『竹内利美著作集 I』など民俗学的研究に学ぶべき事例が多い。
 - 7) 有賀喜佐衛門 (1934) 「不幸音信帳から見た村の生活——信州上伊那郡朝日村を中心として——」『有賀喜佐衛門著作集 V』未来社、1968年
 - 8) 全葬連50年史編纂委員会編、2006、『全葬連50年史』
 - 9) 全葬連50年史編纂委員会編、2006、『全葬連50年史』
 - 10) 井上章一 (1990) 『新版 霊柩車の誕生』朝日選書
 - 11) 山田慎也 (2007) 『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会
 - 12) 碑文谷創 (2003) 『死に方を忘れた日本人』大東出版社
 - 13) 山田慎也 (2007) 『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会
 - 14) 国民生活センター (1988) 『葬儀サービスの実情と比較』の27ページを参考にした。この報告書に記載されていた役務は、札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、松山、福岡などの都市部の一般業者と冠婚葬祭互助会49社の葬祭業を対象とした調査にもとづいている。
 - 15) 東京都生活文化局 (2002) 『葬儀費用にかかわる費用等調査報告書』東京都
 - 16) 弔辞の内容分析は、副田義也 (2003) 『死者に語る——弔辞の社会学』(ちくま新書) に詳しい。

- 17) 前日の通夜式では、弔辞奉読と弔電紹介は省かれる。
 18) 東京都生活文化局 (2002) op.cit
 19) 井上章一 (1990)『新版 霊柩車の誕生』朝日選書、山田慎也 (2007)『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会
 20) SHIMANE (2004), op. cit.
 21) 玉川貴子はこれを「葬儀の商品化」としてとらえ、戦後の葬儀業の発展について分析している。玉川貴子 (2009)「葬儀サービスの生成に関する社会史的研究——高度経済成長期以降における葬祭業界に着目して——」(博士学位申請論文)
 22) Lin.N.,(2001), *Social Capital; A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press

文献一覧

- 青木新門 (1996)『納棺夫日記 増補改訂版』文春文庫
 有賀喜佐衛門 (1934)「不幸音信帳から見た村の生活——信州上伊那郡朝日村を中心として——」『有賀喜佐衛門著作集 V』未来社、1968年
 碑文谷創 (2003)『死に方を忘れた日本人』大東出版社
 井上章一 (1990)『新版 霊柩車の誕生』朝日選書
 井之口章次 (1965)『日本の葬式』早川書店
 伊丹十三 (1985)『「お葬式」日記』文芸春秋
 ジャンケレヴィッチ, V. (1978)『死』みすず書房
 木下光生 (2010)『近世三昧聖と葬送文化』塙書房
 国民生活センター、(1988)、『葬儀サービスの実情と比較』
 小山薫堂 (2009)『おくりびと オリジナルシナリオ』小学

- 館文庫
 Lin.N. , (2001)、『ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論』筒井淳也他訳、*Social Capital; A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press
 長塚節 (1950)『土』新潮文庫
 嶋根克己 (1991)「現代日本の葬送儀礼」『社会学ジャーナル』16号、筑波大学社会学研究室
 嶋根克己 (2001)、「近代化と葬儀の変化」、副田義也編『死の社会学』岩波書店。
 Katsumi SHIMANE (2004)「Planifier sa propre mort: l'après mort dans une société vieillissante», in Pierre Ansart et al. (ed.) *Quand la vie s'allonge France-Japon*, L'Harmattan
 副田義也 (2003)『死者に語る——弔辞の社会学』(ちくま新書)
 竹内利美 (1990)「村落社会における葬儀の合力組織」『竹内利美著作集 I』
 玉川貴子 (2009)「葬儀サービスの生成に関する社会史的研究——高度経済成長期以降における葬祭業界に着目して——」(博士学位申請論文)
 東京都生活文化局 (2002)『葬儀費用にかかわる費用等調査報告書』東京都
 山田慎也 (2007)『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会
 全葬連50年史編纂委員会編 (2006)『全葬連50年史』

嶋根克己 Katsumi, SHIMANE 専修大学人間科学部教授
 玉川貴子 Takako, TAMAGAWA 専修大学人間科学部兼任講師